

第23回教育委員会（臨）

開会日時 平成29年 11月 30日（木） 午前 10時30分
閉会日時 午前 11時24分
開会場所 上板橋第四小学校体育館

出席者

教 育 長	中 川 修 一
委 員	高 野 佐 紀 子
委 員	青 木 義 男
委 員	松 澤 智 昭
委 員	上 野 広 治

出席事務局職員

事務局次長	矢 嶋 吉 雄	地域教育力担当部長	松 田 玲 子
教育総務課長	木 曾 博	学 務 課 長	三 浦 康 之
生涯学習課長	水 野 博 史	地域教育力推進課長	石 橋 千 広
指導室長	栗 原 健	教育支援センター所長	新 井 陽 子
新しい学校づくり課長	佐 藤 隆 行	学校配置調整担当課長	大 森 恒 二
中央図書館長	荒 井 和 子		

署名委員

教育長

委 員

午前 10時 30分 開会

教 育 長 皆さん、おはようございます。本日は、4名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立いたしました。

それでは、ただいまから平成29年第23回の教育委員会臨時会を開催いたします。

今回は、ここ上板橋第四小学校の体育館をお借りして、身近な教育委員会として会議を開催いたします。

本校の校長、高見校長先生初め、教職員の皆様、そしてPTA役員、保護者の皆様、さらには区内の小学校・中学校の校長先生方には、お忙しい中、おいでいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

板橋区教育委員会では、住民の皆様に対しまして、開かれた教育行政を推進する視点から、区民が身近に感じられる教育委員会の実現に向けて、様々な取組を行っているところでございます。

昨年は、中台中学校において、このような形で実施し、本年5月には、その取組の一環として、板橋区役所本庁舎南館にございます教育支援センター研修室におきまして、日中、お時間をとることが難しい保護者の方々に向け、開催時間を午後6時30分からに設定し開催いたしましたが、今回は、地域の皆様や保護者、学校の関係者の皆様方が傍聴しやすい、ご参加しやすい学校において開催することにいたしました。

教育委員会とは、法律に基づき、行政委員会の1つとして区長から独立した執行機関として設置され、教育長と教育委員4名で構成されております。

申し遅れましたが、私は板橋区教育委員会教育長の中川でございます。

続きまして、委員の紹介を私からさせていただきます。

高野教育長職務代理者からでございます。

高 野 委 員 高野です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 青木委員でございます。

青 木 委 員 青木です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 松澤委員でございます。

松 澤 委 員 松澤です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 上野委員でございます。

上 野 委 員 上野です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 以上のメンバーで、定期的に会議を開催し、教育行政の運営に関する基本的な

方針や重要な事項につきまして、審議、決定しているところでございます。

さて、教育委員会では、学校その他の教育機関、社会教育会館、この近くでは教育科学館等を含めまして、そういった機関、学校の組織の編制、教育課程、教科書その他の教材の取扱い、教育職員の身分の取扱い、社会教育、その他教育、学術及び文化に関する事務を行っております。

本日の会議では、「地域とともにある学校をめざして～板橋区コミュニティ・スクールを考える～」を報告事項として、意見交換を行っていきたくと思います。それでは、本日の会議に出席する職員を紹介します。

本日の会議に出席する職員は、矢嶋次長、松田地域教育力担当部長、木曾教育総務課長、三浦学務課長、水野生涯学習課長、石橋地域教育力推進課長、栗原指導室長、新井教育支援センター所長、佐藤新しい学校づくり課長、大森学校配置調整担当課長、荒井中央図書館長、以上、11名でございます。

なお、荒張施設整備担当副参事は、区議会企画総務委員会に出席するため、欠席しております。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により、青木委員にお願いいたします。

また、本日は、41名の方に傍聴にお越しいただいておりますが、会議規則第30条により許可いたしましたので、お知らせいたします。

○報告事項

1. 地域とともにある学校をめざして～板橋区コミュニティ・スクールを考える～

(地域教育力推進課長)

教 育 長 それでは、報告事項を聴取します。報告1「地域とともにある学校をめざして～板橋区コミュニティ・スクールを考える～」につきまして、地域教育力推進課長から報告願います。

地域教育力推進課長 改めまして、皆さん、おはようございます。

地域教育力推進課長の石橋と申します。どうぞよろしくお願いたします。

本日は、地域とともにある学校、板橋区コミュニティ・スクールを考えるということで、コミュニティ・スクールという、新しい仕組みでございますが、これについてご説明させていただきます。

コミュニティ・スクールは板橋区が進める学校を支える仕組みの1つでございます。

板橋区では、板橋区らしいコミュニティ・スクールのあり方ということで検討を始めたところでございます。

コミュニティ・スクールとは、法律上、制度上で言えば、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の47条の6という規定で、学校運営協議会というものを設置している学校をコミュニティ・スクールということになっております。

この仕組みは、地域と学校がパートナーとして協働・連携して、学校を応援す

る取組を推進するための仕組みでございます。

また、学校と地域が連携し、地域でどんな子どもたちを育てたいのか、目標やビジョン、課題を共有して、保護者、地域の方が教育の当事者となって、積極的に子どもたちの教育にかかわり、成長を支えていくという学校づくりを推進するものでございます。

コミュニティ・スクールは、地域とともにある学校、地域に根差した学校づくりのための有効な仕組みだと考えて、コミュニティ・スクールの導入について検討を始めたところでございます。

板橋区の考えているコミュニティ・スクールにつきましては、新しく仕組みをつくるのではなく、今ある組織、仕組みを活かした取組にしたいと考えております。

現在、既に学校支援地域本部、こうした学校の教育活動を応援するボランティアの皆様と一緒に応援する仕組みがございます。また、小中学校には、学校運営連絡協議会という地域の方にご参加をいただいた会議体がございます。

これを学校運営協議会、コミュニティ・スクール委員会へと移行することを考えているところでございますが、この2つ、会議体と実際に学校を応援していただいている学校支援地域本部、こちらの2つが両輪となって協働して学校を支援する活動を推進していく仕組み、これを板橋区コミュニティ・スクールにしたいと考えているところでございます。

まず、両輪の1つであります学校支援地域本部についてご説明したいと思っております。

板橋区には、地域の方が学校を応援する仕組みとして、学校支援地域本部が既に多くの学校で活動されておりますが、今日ご参加の皆様の中で、学校支援地域本部の活動にボランティアで参加されたことがあるという方、よろしければ挙手をしていただけますでしょうか。

(参加経験者 挙手)

地域教育力推進課長

ありがとうございます。

地域コーディネーターと地域ボランティアによって、学校を支えていただいているわけでございます。こちらの上板橋第四小学校では、本年度から学校支援地域本部の活動が始められたことを伺っております。

放課後学習支援や図書館のボランティア、スクールガード、子ども見守り隊などの分野で活動されてきたことをベースに、学校支援地域本部の活動に移行されたと伺っております。

学校支援地域本部は、学校の校長先生の求めに応じて、地域全体で学校教育を支援する仕組みであります。また、地域住民や保護者の皆様がボランティアとして学校を応援しています。

基本的な仕組みは学校の運営、提案に応じて、学校とボランティアの間の調整役となる地域コーディネーターと実際に学校の支援活動を行う地域ボランティアで構成されているものでございます。

今回、ご参加いただいている小学校は、比較的最近学校支援地域本部が始まった学校ですとか、これから地域本部を始めていく学校の保護者の方が多くいらっしゃると思いますので、ここで学校支援地域本部を紹介するビデオをご覧いただきたいと存じます。

このビデオは、学校支援地域本部を置いている学校の先生方と地域コーディネーターを対象に、毎年、シンポジウムを開いておりまして、昨年8月のシンポジウムの際に、学校支援地域本部の活動を紹介するために作成したものでございます。

学校支援地域本部の活動の紹介や、コーディネーターとして活躍されている方のインタビューなどをまとめたものとなっております。

(ビデオ 上映)

地域教育力推進課長

ありがとうございました。

ビデオで学校支援地域本部の活動内容についてご紹介させていただきました。

このビデオにより紹介したとおり、もう既に板橋区では多くの地域の方が学校にかかわっていただき、活躍されていらっしゃると思います。こうした方の力をいただきながらコミュニティ・スクールを始めていきたいと考えているところでございます。

それでは、次に、板橋区コミュニティ・スクールの両輪のもう一方である学校運営協議会について、ご説明させていただきます。

現在、板橋区では学校運営連絡協議会というものを全ての学校に設置しています。これをコミュニティ・スクール委員会、学校運営協議会に移行するということを考えております。

現在の学校運営連絡協議会は、PTA会長や保護者の代表ということで委員として参加していらっしゃる方もいるかと思いますが、皆さんの中で学校運営連絡協議会の委員になっているという方はいらっしゃいますか。

よろしければ、挙手していただければと思います。

(参加者 挙手)

地域教育力推進課長

ありがとうございます。

この会議では、地域の方々、保護者の方々に委員としてご参加いただき、学校の指導方針や、学校の教育活動、児童・生徒の様子などを説明し、幅広く意見をいただき、地域と連携を強化した特色ある学校づくりを行うためのものでございます。

今の仕組みであります学校運営連絡協議会のやり方としては、土曜授業の際、授業や学校の様子を見ていただき、その後、意見をいただくというような形で、区民が参加する学校が多くございます。

現在ある学校運営連絡協議会では、委員が6名程度で、開催回数が基本的には

3回程度ということで実施しております。

また、町会長や民生委員といった方だけの学校もあれば、学校支援地域本部のコーディネーターが既に委員として参加している学校もあります。

また、委員の人数も4人程度のところから10人程度のところもあり、学校によって、委員の構成や活動内容なども若干差があるものでございます。

これらを調整させていただいて、コミュニティ・スクール委員会、学校運営協議会に変えていきたいと考えているものでございます。

この学校運営協議会、コミュニティ・スクール委員会では、より積極的に地域の方に学校の運営にかかわっていただき、また、委員の皆様の意見をより一層積極的に取り入れて、学校の運営を行っていかうとするものでございます。

例えば、コミュニティ・スクール委員会では、校長先生が作成する学校の教育方針を承認するという役割がございます。

これまでの学校運営連絡協議会では、校長先生が委員の皆様に、今年はどうしたいという基本方針で学校を運営していきますという報告をしておりました。

それが、コミュニティ・スクール委員会になると、校長先生が示した学校基本方針に対して、校長先生と委員の皆様で十分に、じっくりと話し合ってもらい、基本方針を承認していただくという、報告ではなく、承認というように変えていただく。そこが学校運営協議会、コミュニティ・スクール委員会の大きな役割になってまいります。

ただし、承認をするためには、学校での取組や課題、子どもたちの状況など、これまで以上に、地域の皆様、保護者の皆様にも理解していただく必要があると考えております。

そのためには、情報公開や意見交換、コミュニティ・スクール委員会の中で十分な話し合いの場を持っていただき、そうした議論を踏まえて、校長先生から提案された学校の基本的な方針について承認していただくということになるかと考えております。

そこで、このコミュニティ・スクール委員会では、学校運営連絡協議会よりも、さらに開催回数を増やし、学校と委員の意見交換の機会を増やしていきたいと考えております。

文部科学省の資料を見ると、「熟議」という言葉が出てくるのですが、熟慮と議論という、少し難しいのですが、じっくり考えて十分話し合ってくださいというものと考えております。

また、コミュニティ・スクール委員会になることで、委員の構成や人数については、これまでより、地域の方により多く参加していただきたいと考えております。

民生委員、地域代表の方、また、保護者の代表であるPTAなど、これらに参加していただいた方に加えて、学校支援地域本部の地域コーディネーター、また、実際に学校を支援していく活動をしていただいている団体の方など、例えば学校開放協力会の方など、地域の方により多く参加していただき、委員の人数も12名程度ということを考えております。

このコミュニティ・スクール委員会で承認した学校の運営基本方針という共通のビジョンや目標を皆さんで共有していただいて、学校ではこうした教育活動を行います、地域ではこんな協力や活動ができます、PTAはこんな取組もやってみたいです、学校支援地域本部ではこんな取組ができるのではないかとといったように、共有したビジョンや目標のもと、それぞれの団体が活動に取り組んでいただければと考えております。

改めて、板橋区が考えているコミュニティ・スクールは、学校運営協議会、コミュニティ・スクール委員会、こちらに地域で活動されている多くの方にご参加いただきます。そして、学校支援地域本部、こちらが地域コーディネーターと地域ボランティアの方で学校を支える学校支援地域本部ですが、この2つを両輪として、より良い学校運営につながることを目指していくものでございます。

板橋区では、学校支援地域本部のほかにも学校開放協力会による寺子屋事業ですとか、各地域で実施されております様々な青少年健全育成事業、おやじの会など、地域の方々が子どもの健やかな成長を願って、様々な取組を行っていらっしゃいます。

学校の応援団というべきものがたくさんあります。こうした学校や子どもたちを応援する様々な活動を、学校を中心に連携・協力を図っていく仕組みとして、コミュニティ・スクールというものを考えているところであります。

コミュニティ・スクールを推進することで、地域、保護者も教育の当事者となっていていただき、積極的に子どもたちの教育に携わっていただけることを期待しているところでございます。

例えば、近くの公園で子どもが騒いでいて、ごみをちらかしたままにするので学校に苦情の電話をかけるといったことがあるかもしれませんが、学校としても、そうした子どもたちに困っているということをコミュニティ・スクール委員会で報告し、地域の方と学校とともに対応策を考えていく、そういうことができるのではないかと考えております。

また、コミュニティ・スクールを導入し、保護者、地域住民等が学校運営や教育活動に参加することで、生きがいにつながったり、子どもたちの学びや体験が充実していくと考えております。

実際、地域の方で、ゲストティーチャーとして学校に来ていただいて、自分の職業や仕事について子どもたちに話をしてもらったり、経験や専門性を活かして、子どもたちの学習を支援していただいているところです。

子どもたちにとっても、地域の方を身近に感じたり、新たな体験ができたり、地域の方にとっても、自分の経験を活かして役に立てるということを実感したり、子どもを身近に感じて、より学校や子どもたちに関心を持っていただく、そういった機会になるかと思えます。

コミュニティ・スクールを導入することによって、保護者、地域住民と学校が顔の見える関係となり、保護者、地域の方との理解、協力を得た学校運営が実現すれば良いと考えています。

こうした活動を通じて、地域の方と顔の見える関係となり、地域コミュニティ

の活性化が図られる、そのようなところも期待しているところでございます。

また、コミュニティ・スクールが導入されている学校では、大規模災害の際などにおいて、避難所の開設などが、非常に迅速に、組織的に対応することができたというような報告もされているところでございます。

P T Aの皆様は既に学校の一番の理解者であり、応援団でもございますが、コミュニティ・スクールの導入によって、地域の中にもこうした学校を応援してくれる方、応援団が広がっていくことを期待しているところでございます。

例えば、P T Aだけではボランティアが足りない、そういったときに、地域の方のお手伝いをお願いしやすくなるかもしれません。P T Aの皆様には、ぜひ学校の応援団を増やしていただくお手伝いをさせていただければと思っております。

地域の方々に学校の応援団になっていただき、学校を中心とした地域コミュニティの活性化が図られることで、板橋区教育ビジョン2025の描く将来像であります「“いきいき子ども！あたたか家族！はつらつ先生！” 地域が支える教育の板橋」、「“学び合う、学び続ける人づくり！” 地域を創る教育の板橋」の実現にも資するものと考えております。

コミュニティ・スクールの導入については、P T Aを初め、地域の皆様のご協力をお願いして、説明を終わりたいと存じます。

この懇談会の後、P T Aの皆様との懇談会ということで、地域とともにある学校となるために必要なことや、P T Aとしてどのようなかわり方をしていけるのか、板橋区コミュニティ・スクールに期待することなど、今の説明ではなかなか分かりにくいところも多かったと思いますが、お話し合いをしていただければと思っております。

どうぞよろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

教 育 長 それでは、時間も限られた中ですが、各委員から、所感や質疑等がございましたら、ご発言いただきたいと思えます。

では、青木委員、よろしいでしょうか。

青 木 委 員 それでは、皆さんのお手元に、カラー刷りの4枚ものの冊子を別刷りでご用意してございます。

こちらをご覧になっていただきながら、説明をいたします。

先ほどご紹介いただきましたこのコミュニティ・スクール。板橋区でこのコミュニティ・スクールを考えるという形で、今、活動を推進されていますが、どのようなものがあるかというようなところを少し紹介させていただきます。

実は今、日本の教育の未来ということで、色々な議論を国の省庁の中で行っています。

まず、縦割りであった省庁というものが、内閣府を中心に、例えばこの資料は、文部科学省と経済産業省と総務省が連携して、これからの未来をどうするかというのを考えたという報告書の一部でございます。

全部で約400ページ弱にわたる非常に膨大な、詳細な調査が出てきている報

告書なのですが、日本がこれからどうしていくべきか。この閉塞感を打破していくために、「Society 5.0」という概念があります。これは超スマート社会と言われるものです。

ご存じのように日本は今、少子化、高齢化という非常に厳しい未来があって、これを迎えつつあります。これを解決する中で、今いる若者、そして子どもたち、これがどのように未来にかかわっていけるのかというところの問題が一番大きいと思っております。すなわち教育の問題です。

その教育の中で、人材育成というテーマ、この資料の最初のページにあるように、打ち破るべき課題、壁ということです。5つ、ございます。

特に、子どもたちにとって重要なのは、②と③というところになってきます。

具体的な人材像、教育すべき人材像、その下にある、社会の中で活躍できる子どもたち、若者、これが新しくクローズアップされているような人間性として、紹介されているかと思えます。

これは、今、世界で様々な国々の若者と子どもたちと比べて、やはり日本の子どもたちが、ともすれば、足りない部分、もっと育てていきたい部分であります。

特に3番目にありますように、多様性とチャレンジを一層許容し、アントレプレナーシップ（起業家精神）に富む社会というようところが非常に大きなテーマだと思えます。

資料の2枚目では、今の日本と海外の違いという事例が挙げられております。

左の上にあるのが、今、世界を引っ張っていると言われていた若き創業者たち。ここに挙げられている人たちの年齢は30代、40代といった非常に若い社長、代表でございます。

特にザッカーバーグ氏というのは、20代で会社を立ち上げて、今、世界的な企業の社長という地位です。

このような若き創業者を生み出す社会構造、これが非常に大事だということなのですが、それでは、日本では今までこういった教育が全くなされていなかったのかというと、そうではございません。

右の上にあるのが、日本の高度成長期という戦後社会を迎えたときに、吉田松陰というところから始まって、松下村塾、時代劇のファンの方はドラマになったのをご覧になった方がいらっしゃるかもしれません。近年では、松下電器産業を興した松下幸之助氏、それからソニーの井深大氏等は、創業した際にこのような年齢だったということです。

日本にも、こうしたベンチャー環境を培って育てるという土壌が、少なくとも一時期はあったということを示しています。

ですから、その時代に戻れとは言いませんが、その時代のマインドを思い起こして、教育の中にそれを反映していくということが重要だということを言いたいわけです。コミュニティ・スクールというものは、その要素を培うために非常に重要な取組だと思えます。

小学校の先生方は、勉強することが多様になってきて、しかも覚えることが多い、教科書を教えるのが精いっぱいという中で、やはり社会性を養うといったよ

うな点では、コミュニティ・スクールが培う、例えば体験学習、それから、社会の大人の人たちの様々な経験、先ほどもご紹介がありましたが、このようなことが、最初に言いましたような、子どもたちにとって夢を与えたり、目標を与えたりする1つの起爆剤になると認識しています。

ですから、この辺りを日本なりに伸ばしていくということで、日本がこれから未来に向かって強みのある分野、実はこの報告書の中で5つ挙げられているわけです。

日本が得意である分野。今、テレビ等でも話題になっているロボットという分野があります。

その辺りの技術を中心にして、5つの重要取組分野というものが取り上げられています。

1つが、オリンピックのときに安倍首相がやると言っている、自動車の自動走行、あるいはドローンなどを使ったモビリティサービス。それからものづくりです。

それからバイオの分野。そして、建築や土木の分野ではプラントの保全、メンテナンスですね。これを守り続けていく。オリンピックの施設や設備をつくったのは良いですが、それを長く、有効に使うというようなこと。そして、それらを使うスマートライフ。

超スマート社会につながるようなイメージ、各家庭がとにかく豊かに暮らせるような社会、これを実現していきたいというテーマ。これが日本の中で、省庁が取り上げようとしている、ここから伸ばしていきたいというテーマです。

その辺りを踏まえ、若者たちにチャンスをとくさん与えたいという中で、資料の3枚目にあるような、例えばプログラミング教育、それから英語教育というものが小学校で始まってきたというバックグラウンド。今、例えば体験学習というものでは「World Robot Summit」というものがございます。

これは既に、先月に経済産業省から発表されたものでございますが、「World Robot Summit 2018」、東京ビッグサイトで日にちも決まっております。

10月17日から21日、こうしたものを通じて、オリンピック開催の2020年には、「World Robot Summit 2020」として、世界中から、若者を中心に招いて、ロボットの競技会を開こうではないか、オリンピックと同じようなものをロボットで行おうではないか、というものが計画されています。

こうした分野を伸ばしていくことで、やはり子どもたちの未来に向かって、新しい企業やサービスを創作したり、考え出すというような1つのきっかけになるのではないかとということで提案されているものです。

そして、この中で、やはり子どもたち自身、活躍していただきたいというところが、最後にあります「小学校プログラミング教育の必修化」というバックグラウンドになっています。

それから、ここまでのシナリオの中で、実際、教育の中でやっていこうという

ことで実現されたものになってございます。

具体的には資料をお読みいただくとして、下の緑の四角の中にありますように、小学校段階での考え方、プログラミング的思考、これを身につけられるようにするということが小学校の段階です。

中学校の段階では、実際にプログラミングを行う。情報セキュリティとしての倫理観も含めて、これを充実する教育をやっていただく。

高等学校の段階では、これをさらに実装、社会実装といいます。活用、応用する能力を身につけるような教育を組み立てていこうという流れです。

こうしたバックグラウンドの中で、先ほども申しましたように、非常に大事なこととして、学校の先生ができないグッドプラクティス、要するに体験学習の部分をコミュニティ・スクールの中でたくさん培っていただきたいし、体験していただきたい。それが最初に申し上げました、未来の子どもたちの育成につながっていくと思いますので、その辺りのご協力をということで報告させていただきました。

どうもありがとうございました。

教 育 長 ありがとうございました。

色々議論したいところですが、時間も限られておりますので、続いて、高野委員、お願いします。

高 野 委 員 私がコミュニティ・スクールの中で一番のキーワードだと思うのは、「当事者意識」という言葉がとても大切なのではないかなと思っております。

今、学校に伺うと、先生方が大変お忙しくされているのですが、学校支援地域本部が入ることで、色々なお手伝いができるようになりました。

これが、さらに進んでコミュニティ・スクールになって、当事者意識を持っている地域の方たちも一緒に学校の忙しさについても、もっと考えていくことができるのではないかな、こんなお手伝いができますよといったことを、もっと積極的に、地域から提案していただけるし、また、学校の中での多忙の優先順位を先生方だけが決めるのではなくて、もっと地域から、「先生、ここはもうやらなくても大丈夫ですよ。子どもたちに向かうことが一番大事なので、そこを優先してください」というような意見も、当事者意識を持つ中で生まれてくるのではないかなと思っています。

私は教育委員になる前に、青少年委員という委員をさせていただいておりました。

青少年委員は、教育委員会の中でも、学校と地域をつなぐという立場なのですが、私自身が心がけていたのは、地域の行事に参加して頑張っていた子どもがいると、必ず校長先生に「あの子、野外キャンプで食事係を頑張っていましたよ」とか、「お祭りの中で、重い荷物を運んでいましたよ」というようなことをお伝えしておりました。

また、逆に、自分が学校に行ったときに、いつも地域で見ている子が授業で一

生懸命頑張っていたり、すばらしい作品、作文を書いていたりと、学校の中で見つけたその子の良いところをほめて、地域の方にも、「あの子、学校ではこのように頑張っていますよ」というような、学校と地域をつなぐパイプ役を務めてきたような気がいたします。

先日、子育ての講座がありまして、その中で、「子どもを伸ばす他育てのすすめ」というお話がありました。「た」というのは「他」という字なのですが、子どもを、家族の中だけではなくて、地域の人、色々かかわる人たちからたくさんほめてもらうことによって、自己有用感や自尊感情が育っていく、そうしたものがとても大事だというお話を伺ってきました。

まさにコミュニティ・スクールで色々な地域の方が学校にかかわっていくことで、子どもたちが様々な大人から色々なことを教えてもらったり、認めてもらったり、ほめてもらったり、そうしたところはコミュニティ・スクールでは期待できるのではないかなと思っています。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、上野委員、よろしいですか。

上 野 委 員 コミュニティ・スクールの仕組みを、説明していただきましたが、正直な感想として、学校でやればできるということにも限界が来ているのではないかなと思っています。特に、家庭教育、地域教育の重要性ということで、子育ての役割というものは、分担しないと難しいのではないかなと思っています。

私は、競泳をやっております、競泳はほとんど個人競技ですので、マンツーマンの指導というものが非常に多くなってきますが、見ていますと、マンツーマンの限界というものがあります。

極端な話になりますが、1人の選手に金メダルをとらせたとして、それでは、そのコーチが優秀かというところも言い切れず、2人目、3人目と、複数の選手にメダルを取らせるようになると、本当に優れた指導者と言えるのかなということです。

ところが、親の立場からすると自分の子どもしか見ないというようなマンツーマンの面があると思いますので、子どもを複数で見る、他の子ども、ほかの親というようなかわりで、コミュニケーションというものは非常に重要ではないかなと感じております。

また、このコミュニティ・スクールの趣旨の説明において、チームいたばしの中、この仕組みの中で、組織は分かっていますが、板橋区との関係というところは、どのようになるのかなと思います。この組織図の中から、板橋区との関係というものは、今後、我々で考えていかなければいけないのかなと感じております。
以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 先ほど申しあげましたように、教育委員会というものは、いわゆる区長部局と

っている部局と独立した執行機関であります。そういう意味では、その連携というところについて、上野委員のご指摘のように十分に考えていかないといけないところなのかなと思います。

松澤委員、お願いいたします。

松澤委員 本日の会議の中で、コミュニティ・スクールという点で考えますと、私もPTAの会長をしていた経験がございまして、学校と地域、そして保護者ということで、そのつながりが非常に大切だなと感じました。

その中で、今、おやじの会ですとか、寺子屋ですとか、学校支援地域本部ですとか、先ほど高野委員がおっしゃっていた青少年委員、青健などがあり、子どもたちが1つの学校に対して非常に色々な組織が重なっているのではないかと感じます。

そして、それをコミュニティ・スクールという機関が、シンプルにしていくことが行政にとっては大事なのではないかなと思います。それは行政組織が縦割りという、色々な組織によって違う事業が行われているということについて、私は教育委員になって初めて知ったことでありまして、そうしたところの改善についても、これから必要になってくるのではないかなと考えております。

そして、学校にとっても、より良いコミュニティ・スクールでなくてはいけないだろうと思いますが、一番大切な部分は、そこに通っている子どもたちであると改めて思います。

大人たちが、こうした事業が良いのではないかと考えて、実際にやってみますが、子どもたちは正直に言って、やはり良い事業は楽しそうにやっていますし、すごく人も集まっています。しかし、余り人が集まっていない事業は、子どもたちには、やはり余り楽しくないのかなということ、実際にやってみて感じています。

その辺りも、地域にかかわる大人の方が、むしろ子どもたちよりも熱くなるくらいに真剣に向き合って、子どもの目線がかかわっていただければ、子どもたちもそれについてきてくれるかなと思いますので、最後は大人の、子どもたちへの愛情ですとか、思いですとか、そうしたものが子どもたちの心を動かして、豊かに成長させてくれるのではないかなと感じております。その辺りも含めて、進めていただければ良いかなと思います。

よろしくお願いいたします。

教育長 ありがとうございます。では、最後に私からお話させていただきます。

先ほどのビデオ上映の際に画面に出た関口校長先生にも、本日、いらしていただいております。

関口校長先生がお話されていた言葉が、実はコミュニティ・スクールの神髄なのではないかなと思いました。

学校を変えるわけではないのですよね。学校をより豊かな場所、あるいは、より豊かな教育活動にすること、これが子どものためによろしいということ。その

ために、どんな手段をとるかということなのですが、そうなってきたときに、そもそも学校とはどのような存在だろうかというところから考え直す必要があるかなと思っています。

学校とは、当然のように、子どものためにある。子どものためにあるということは、イコール保護者や地域の方々、いわゆる納税者である保護者や地域の方々のためにある。

つまり地域の財産である学校、この学校が今まではどちらかというと、決まったことを保護者の方、あるいは地域の方に、協力してほしいと言っていたのですが、学校は地域の財産なのだから、学校をどういう学校にするかということに保護者や地域の方の声が加わる必要があるのではないかなと感じます。

その上で、最終的に校長先生が、例えば上板橋第四小学校をどういう学校にするかと考えるときに、保護者や地域の声がそこに届いて、それを踏まえた上で、校長先生が学校を運営したり、運営していくというようなシステムが今まで余りなかったということで、そこもきちんとつくっていくべきだなと感じました。

今まで、学校の応援団はPTA、「parent-teacher-association」と言っていました。

これを、PTCA、「parent-teacher-community-association」、つまり学校と保護者と地域が一体になって、子どもたちのための学校の応援団にしていこう。そのためには、1つ、やはり学校側は、これはあえて言うのですが、もっと、つらいことや、苦しいことや、困っていることを保護者や地域の方にオープンにした方が良いと思います。

オープンにして、それでは「私たちはこういうことをやりますよ」とか、地域の方が、「こういうことを手伝いますよ」といったときに、素直にそれを受け取って、一緒になって地域の子どもの育てていく。そういう仕組みができると、子どもたちにとっても良いことですし、地域の方々がそこに集まって子どもの笑顔を見ることは、本当に生きがいだと思いますし、自分の心もあたたかくなるのではないかと思います。

そして、そこに集まった地域の方々が顔を合わせて、「ああ、すぐ近くに住んでいたんだね」ということで、地域に帰って、また地域コミュニティの活性化につながっていく。そのような仕組みづくりが板橋区コミュニティ・スクールの目指すところではないかなということを感じています。

氷山の一角という言葉がありますが、私はそれが子どもかなと思います。

実は海の中ではもっと大きく、それを支えている。それが今までPTAだったものが、PTCAということでCをきちんと位置づけている、そのような仕組みづくりをすることが、これからの、先ほど青木委員がおっしゃったように、色々と変わっていく社会に対応できる子どもたちを育てるし、上野委員がおっしゃったように、家庭の役割、学校の役割、地域の役割を見直す、さらには松澤委員がおっしゃったように、色んな方が加わることによって子どもとの関係性が密になる。

そして、高野委員が最初におっしゃったように、当事者意識、つまり自分は自

分の子どもを育てるとともに、地域の子どもを育てていくのだというような当事者意識を持つようになれば、すてきな学校づくり、地域づくりにつながっていくのではないかなと感じているところです。

ぜひ、皆様方とともに、これからさらに板橋区コミュニティ・スクール、これをどのようにしていくのかということで、ぜひ、この後、皆さん方が学校に期待すること、あるいは、こんなことが私たちにはできるということを率直に出していただくようなお話し合いにしていいただければと思います。

もっと教育委員の皆さんのお話を伺いたいところですが、この後、会場の皆さん方のお話を聞く機会がありますので、本日の教育委員会は以上をもちまして、終了いたします。ありがとうございました。

午前 11時 24分 閉会